

---

1975年、全国歴史学大会（第18回）の主催を担当した韓国美術史学会は、同年が日本の植民地支配から解放されて30年目、すなわち光復30年にあたるのを記念して、大会テーマを、「光復30年韓国歴史学界の反省と方向」と定めた。ここに訳出したのは、ソウルの東国大学校講堂で5月30日に開催された同大会における発表と討論会の記録である。原文は『歴史学報』第68輯と『考古美術』第126号に分載されている。『歴史学報』は1952年に創立された「歴史学会」の機関誌で、1976年末現在、第72輯（初期不定期、現在季刊）まで出ている。また『考古美術』は、1960年に「考古美術同人会」として発足、1968年に「韓国美術史学会」と改称した同会の機関誌で、130号（初期月刊、現在季刊）が刊行されている。共に韓国における歴史学研究に重要な地位を占める学術誌である。

韓国とわが国は、地理的・歴史的に接近あるいは密着した関係にあるにもかかわらず、研究成果の紹介は大いに不足している。交流もあるがその分野は限られている。ここに訳出した解放後30年間の韓国歴史学界の反省と、今後の方向についての論文が、現在の韓国歴史学界の研究の関心と水準を知り、交流を深める緒ともなれば幸いである。

この記録の日本語への翻訳を、快く許可して下さい。歴史学会・韓国美術史学会に対し、心から感謝の意を表す。